

夏目漱石は『虞美人草』第18章にこう書いた。『持って生れた心の作用を、不都合な所だけ黒く塗って、消し切りに消すのは、古来から幾千万人が等しく失敗した陋作^{ろうさく}である』そして『硝子戸の中』第11章にこう書いた。『相手に自分という正体を黒く塗り潰した所ばかり示す工夫をするならば、私がいくら貴方に利益を与えようと焦慮^{あせつ}ても、私の射る矢は悉く空^{あだ}矢^やになってしまっただけです』

昔から自分の不都合な部分を隠して良く見せようとしても、嘘はいつか思わぬところでバレる。原因が結果に結びつくという哲学である。

まず本来を隠してついた嘘がうまく真実に偽装できると、今度は本当のことが言えなくなる。そして最初の嘘に辻褃を合わせるために隠蔽の輪を重ねなければならなくなる。結局自分を救おうとして余計な策を弄したために、その嘘で却って身動きが取れなくなる。「ああ、むしろ最初から正直に言えばよかった」それが古来からの結末である。

何かを進めようとするとき、魂でぶつかるところに予想外の道が開ける。だから何かの解決を図ろうと思ったら、真実に従わなければならない。恥をさらすというのは自分の不利益のように思えるが、真実を隠して得られるのは、むしろそれ以上の不利益の恥の上塗りである。物事の解決を真に望むなら、魂でぶつかっていらっしやい。人情が応えるだろう。